

学 位 論 文 要 旨

氏 名 竹本 晋也

題 目 〈教育の言語〉に関する研究序説

—道徳授業における営為の哲学的な考察を通して—

本研究の目的は、教科化以降の道徳授業において散見される“きく”、“書く”、“話し合う”、“見る”という四つの営為についての哲学的な考察を通して、〈教育の言語〉(language for education)について研究するための糸口を明らかにすることにある。

序章では、まず本研究が〈教育の言語〉という言語を分析の対象としているという意味において、哲学の言語論的転回(linguistic turn)の延長線上にあることを確認した。その上で、英国の教育哲学者であるスタンディッシュ、P.のこトバを引きながら、1990年代からコンピテンシー育成をめざす教育改革が世界的な潮流となるなかで、教育について語るための思慮深く豊かな言語(〈教育の言語〉)が失われているのではないかという問題提起を行った。そして、〈教育の言語〉に関わる先行研究として、教育学のパトス論的転回、こトバの回復を参照した後、本研究の対象と方法について論じ、次章以降の見通しを示した。

第1章では、鷲田清一を手がかりに、道徳授業における“きく”営みについて、身体、場所、時間、計画、方向、存在という六つの側面から考察を行った。この考察を通して、教師の“きく”営みが、単なる一つの技術ではなく、道徳授業の成否を左右するほどの大きな力をもつ営みであることを指摘した。そしてそれ故に、道徳授業を実践する教師自身が、“きく”営みを捉え直す必要性があることを主張した。

第2章では、オング、W.を手がかりに、道徳授業における“書く”営みについて、オラリティーとリテラシーの共鳴という視座から考察を行った。この考察を通して、今、趨勢にあるリテラシーがいかにオラリティーに根差したものかということを明らかにした。また補節においては、道徳授業における評価を取り上げ、道徳授業が、学習評価論やカリキュラム論といった他の学問領域の研究成果の何を受容し、何を受容してはならないのかという視点の重要性について論じた。

第3章では、ローティ、R.の会話概念を手がかりに、道徳授業における“話し合う”営みについて考察を行った。この考察を通して、目的—手段の構図に回収されない話し合いのあり方を提案した。その上で、授業者である教師自身が“話し合う”営みにおいて、工夫と拘束の狭間、公と私の狭間、

一致と不一致の狭間という三つの狭間に身を置くことの重要性を指摘した。さらに、子どもたちには、終極の語彙を一旦は修めつつも、改めてそれらを疑い、場合によっては再記述しようとする批判的な姿勢も、併せて育てていく必要があることにも言及した。

第4章では、マードック、I.の〈見方の倫理〉を手がかりに、道徳授業における“見る”営みについて考察を行った。この考察を通して、見ることそれ自体を学ぶ道徳授業という別のあり方について検討した。また、手段化された“見る”営みによって、世界を見る自己が強化されがちだが、改めて世界と自己の不可分性を認識する重要性を指摘した。さらに、教育DXや個別最適な学びといった語りが趨勢となる今、より一層、道徳授業の存在価値が問われていることも指摘した。

終章では、〈教育の言語〉について研究するための糸口として〈あいだ〉という多義的な概念を提案した。まず第1節では、各章を内容的視座から振り返った上で、目に見える行為の遂行を伴わないことばが〈教育の言語〉から消えていっているかもしれないということ(第1章)、学校教育に関する〈教育の言語〉が、徐々に単一化しているのではないかということ(第2章)、〈教育の言語〉にとって曖昧さは、省除の対象などではなく、欠くことのできない特質なのではないかということ(第3章)、ICTが学校教育の基盤的ツールと位置付けられることに伴って、これまでとは異なることばが〈教育の言語〉に加わってきているということ(第4章)、という4つの点を〈教育の言語〉の一端として論じた。次の第2節では、教育という営みを語り得る言語は、異なる複数の言語が、互いの〈あいだ〉を保持しつつ並存する言語でなければならないと主張した。そしてそこには、哲学に限らず、政治、科学、行政、経営管理といった様々な言語が含まれるであろうことを踏まえ、〈教育の言語〉を使用する者には、言語と言語の〈あいだ〉への注意が求められることを指摘した。さらに、本研究において試みた複数の言語使用は、単一の言語で明瞭かつ論理的に言明するのとは別の仕方、教育という豊かな営みを語るための一つの方途となり得るだろうと付言した。最後の第3節では、今後の課題として、異なる領域を考察対象とする必要があること、教育学の言語について検討する必要があること、学校教育に限らない教育全体を視野に入れることという3点を挙げ、序説としての本研究は、まだまだ緒に就いたばかりであるという認識を示した。